道草展:未知とともに歩む



展覧会名:道草展:未知とともに歩む

会 期:2020年8月29日(土)~11月8日(日)

会 場:水戸芸術館現代美術ギャラリー

出品作家:上村洋一、ロー・ヨクムイ、ミックスライス、ウリエル・オルロー、露口啓二、

ロイス・ワインバーガー

休館日:月曜日 ※ただし9月21日(月・祝)は開館

展覧会のポイント

- ○国内外で活躍する 6 組のアーティストの作品を通して、人間と環境のつながりを考える現代美術の 展覧会です
- ○日本初公開作品や新作、遺作を含む約 40 作品を展示
- ○「植物の扱い方は社会そのもののあり方を物語る」—「自然」と「第二の自然」のあわいから見えて くるもの
- ○未知とともに歩む-芸術実践におけるフィールドワーク

特に注目の作品や展示

- ○「最も良い庭師は、庭を放っておく」* 一口イス・ワインバーガーによる遺作を水戸芸術館広場にて 展示
- ○人間と自然の境界なきエコロジーを探る―上村洋一による新作インスタレーション
- ○人間と環境の「これから」はどうなっていくのか―茨城大学地球・地域共創機構と連携した「道草 資料室」で日々の気づきや、身近な環境から地球規模の問題を考える

趣旨

異常気象や環境汚染など、今日、人間の営みが環境に与える影響はその在り方を問われる重大な局面を迎え、政治や経済に対して積極的な対策を求める声が世界各地で上がっています。本展は、このような社会的意識の高まりを背景に、植物への関心やフィールドワークから生まれた現代美術作品を通して、人間がその環境とともに歩んできた道のりを考察する展覧会です。植物にまつわる歴史や人ならざるものの存在に目を向けてきた6組のアーティストによる、ドローイングや写真、映像、インスタレーションなどさまざまな表現から、人間と環境のつながりを考えます。

本展はまた、人間と環境のつながりの「これから」を参加者とともに想い描く関連プログラムを実施します。気候変動適応に関する資料室や講座の開設など、体験や対話を通した双方向的な学びから、一人ひとりが地球規模の問題や共存社会を思考する機会を創出します。

展覧会のポイント

○国内外で活躍する 6 組のアーティストの作品を通して、人間と環境のつながりを考える現代美術の展覧会です

上村洋一(1982年千葉県生まれ。同地を拠点に活動)

ロー・ヨクムイ(1982年香港生まれ。同地を拠点に活動)

ミックスライス(2002年結成。韓国のソウルを拠点に活動)

ウリエル・オルロー(1973年スイスのチューリッヒ生まれ。ロンドンとリスボンを拠点に活動)

露口啓二(1950年徳島県生まれ。現在北海道を拠点に活動)

ロイス・ワインバーガー(1947 年チロル州シュタムス生まれ。ウィーンを拠点に活動し、2020 年 同地にて永眠)

○日本初公開作品や新作、遺作を含む約40作品を展示

本展では、ロー・ヨクムイ、ミックスライス、ウリエル・オルローら海外の注目作家による日本初公開作品や、美術と音楽の両分野から注目を集める上村洋一の新作、ロイス・ワインバーガーの遺作など本展でしか見られない作品を一挙にご覧いただけます。また、露口啓二によるインスタレーションは、代表作を再構成した今までにない試みでの展示となります。

○「植物の扱い方は社会そのもののあり方を物語る」—「自然」と「第二の自然」のあわいから見えてくるもの

第二次世界大戦後、自然環境保護運動が活発になるなかで、芸術表現の中にも自然への介入や環境倫理、公害問題への関心が沸き起こりました。1990年代の地球温暖化対策に関する国際協調の動きや、企業や政府による積極的なアクションを求める近年の大規模な抗議運動など、社会のなかには人間と環境の共存を模索する動きがあり、その思想に共鳴する芸術表現を扱った展覧会も数多く企

画されてきました。日本国内ではまた、東日本大震災もアーティストたちが環境について考える大きな契機となりました。しかし一方で、その間にも持続可能性を省みない開発や資源の利用、地球温暖化が続いていることは事実です。

本展では、人間活動とは切り離せない普遍的テーマである「人間とその環境とのつながり」を、特に90年代以降に制作された作品をとおして掘り下げます。そのなかには、自然との境界において立ち現れる、支配構造や歴史の忘却、社会的不公正など「第二の自然」としての人間社会における矛盾やねじれに対する批判的な視点が映し出されています。この視点は、ワインバーガーの言葉を借りれば「植物の扱い方は社会そのもののあり方を物語る」からこそ可能なアーティストによる詩的かつ政治的な問題提起ともいえるでしょう。

○未知とともに歩む-芸術実践におけるフィールドワーク

「地図の上の知られざる領域は、知りえる事柄というものもまた未知の大洋に囲まれた島のような ものだと語りかけている。」

(レベッカ・ソルニット『迷うことについて』2019、左右社、東辻賢治郎訳)

本展では、サブテーマとして芸術実践におけるフィールドワーク(現地に赴いて行う実地調査)にも目を向けます。予測されるゴールではなく作品制作のプロセスに重心を据え、参加や観察、記述を通して対象の多層的な有様に迫るこの手法は、状況のドキュメントに止まらず、対象が時をかけて移ろう有様や情緒といった記述化しがたい領域を作品のなかに捉えることによって、見る者の想像力を掻き立てます。他方、これらの作品を、芸術実践における対象との非対称性や表象の問題を意識したアプローチの例として議論することもできるでしょう。

また、出品作品の一部は、環境のなかに身を置き、作品創作の過程に未知なる環境的要素が浸透してくることを受け入れた芸術表現としても見ることができます。作品に宿されたアーティストの身体的な感覚(またはその消失)がもたらす環境的、周縁的なパースペクティブは、「人間と環境のつながり」を問い直すヒントとなるでしょう。

※なぜ「道草」なのか?

日本語の「道草」にはふたつの意味があります。ひとつは目的に向かう途中で他の物事にかかわって時間を費やす行為を指し、もうひとつは道端の植物そのものを指します。前者の行為は普段省みることのなかった機微や変化を捉えるパースペクティブの広がりをもたらし、後者は理想化された手つかずの自然に比べ、より人間に身近なエコロジーを意識させます。

さらに、人間との共存は、生命の歴史からみればちょっとした「道草」と捉えられるかもしれません。 そして、その共存は今、異常気象の顕現や自然災害の頻発に直面し、大きな分かれ道にさしかかっています。人間の営みによる環境への影響が看過できない岐路にあるなか、進歩の歩みを少し緩め、私たちをとりまく環境に耳をすまし、現在地に至った過程に改めて目を向けることが必要なのではないか、そういった思いがこの言葉には託されています。

特に注目の作品や展示

○「最も良い庭師は、庭を放っておく」―ロイス・ワインバーガーによる遺作を水戸芸術 館広場にて展示

2020年4月に惜しまれつつも永眠したロイス・ワインバーガー。その活動は、荒地に生植する植物に目を向けた詩的かつ政治的なアクションとして、また、作品の創作過程でフィールドワークを重視した先駆的存在として、芸術と自然の議論に大きな影響を与えてきました。本展では、水戸芸術館広場のために構想された遺作を、アーティストの長年の共同制作者であるフランツェスカ・ワインバーガー氏の協力の下に展示します。《ワイルド・エンクロージャー》(2020)は、3メートル四方の屋外インスタレーション。1993年ザルツブルグで発表され、その後世界各地で展示されてきたワインバーガーの代表作《燃焼と歩行》*と通底する「植生のシステムにゆだねられた自然発生的なカオスの場」が当館広場に出現します。

* 歩道のアスファルトを剥がし、むき出しになった地面に芽吹く自然そのものを見せた作品。本展では広場芝生部分に作品を展示します

○人間と自然の境界なきエコロジーを探る―上村洋一による新作インスタレーション

「瞑想的な狩猟」としてフィールドレコーディングを行い、人間と自然環境との関係を探る上村洋一による新作《息吹のなかで》を発表します。上村は、2019年2月から北海道大学 CoSTEP の協力で知床半島の流氷を調査。その過程で、流氷自体が生み出すさまざまな環境音や、海中生物の鳴き声、そして、いまは聴くことができない「流氷鳴り」*を人間の呼吸や口笛で再現した音などが録音されました。それらの音の混成によってつくられる瞑想的なサウンドスケープが展示室全体を満たします。また、本作は真夜中の流氷の海で行ったフィールドレコーディングの際に、闇のなかで人間世界の外側を感じたというアーティスト自身の体験からも着想を得ています。その体験は、今日世界中が模索を余儀なくされている、目に見えないものと人間の営みの共存という課題にも通じているといえるでしょう。

タイトルに謳われる「息吹」すなわち呼吸とは、人間がエネルギーを生み出すことに伴う代謝機能のひとつです。《息吹のなかで》は、呼吸という人間にとって不可欠な現象でさえ他の生物が生成する酸素によって可能になること、また一方で、二酸化炭素の排出という人間活動に伴う代謝が地球温暖化による流氷の融解を、ひいては「流氷鳴り」の消滅を引き起こしていることを示唆します。人間の生とその環境が分かち難くつながっていること、その境界なきエコロジーを鑑賞を通じて体験するインスタレーションです。

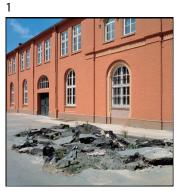
* 流氷鳴り:流氷の隙間から空気が押し出され、人間の口笛のような音を奏でる自然現象。現在は流氷の減少によって聴かれる機会がなくなっている

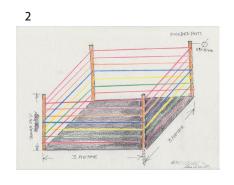
○人間と環境の「これから」はどうなっていくのか―茨城大学地球・地域共創機構と連携 した「道草資料室」で日々の気づきや、身近な環境から地球規模の問題を考える

気候の変化や身近な環境に対する気づきは、時に地球規模の大きな変動ともつながっています。本展覧会では、茨城大学地球・地域環境共創機構(GLEC)*と共同し、環境に関する専門的な研究と市民の身のまわりの関心をつなぐ試みとして、気候変動や環境の変化に関する資料展示、一般の方々から地域環境に関する情報を募るオンライン企画等を計画しています。

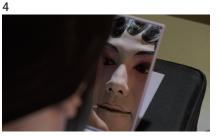
* 茨城大学地球・地域環境共創機構:地球環境および地域環境を対象とした研究の促進や、環境問題の解決を目指し持続的な環境の共創や社会連携の機能強化を図る教育研究のための機関として、2020年に設立。

図 版 展覧会広報用にデータを貸し出しますので、ご要望の方は鳥居までお問合せください。



















1.ロイス・ワインバーガー 《燃焼と歩行》ドクメンタ10の記録写真、1997 Courtesy of Studio Lois Weinberger and Krinzinger Gallery, Vienna※参考図版 Lois Weinberger, *Burning and walking*, documentation of documenta X, 1997 Courtesy of Studio Lois Weinberger and Krinzinger Gallery, Vienna *referential image

- 2.ロイス・ワインバーガー《ワイルド・エンクロージャー》のためのドローイング、2020 Courtesy of Studio Lois Weinberger and Krinzinger Gallery, Vienna Lois Weinberger, drawing for *Wild Enclosure*, 2020, Courtesy of Studio Lois Weinberger and Krinzinger Gallery, Vienna
- 3.露口啓二「自然史」より《東北太平洋岸・南相馬市・井田川浦》2015、発色現像方式印画 Keiji Tsuyuguchi, *Minamisoma, Itagawaura*, Tohoku Pacific Coast, from the series "Natural History", 2015, chromogenic print
- 4.ロー・ヨクムイ(羅玉梅)《殖物》2019、3チャンネルビデオ Law Yuk-mui, *Pastiche*, 2019, 3 channel video
- 5.ミックスライス《つたのクロニクル》2016、2チャンネルビデオ mixrice, *The Vine Chronicle*, 2016, 2 channel video
- 6.ウリエル・オルロー《ムティ(薬)》2016-18、シングルチャンネルビデオ Uriel Orlow, *Muthi*, 2016-18, single channel video
- 7.上村洋一《phantom power》2019、流氷を溶かして生成された水、グラス、金属板、スピーカー、音(撮影:加藤健) ※参考図版

Yoichi Kamimura, *phantom power*, 2019, water generated by melting drift ice, glass, metal plate, speaker, sound (photo: Ken Kato) *reference image

8.上村洋一《息吹のなかで》のためのドローイング、2020 Yoichi Kamimura, drawing for *Breath You*, 2020

【クリテリオム97】

肥後亮祐《Sandy Island》2020 ミクストメディア Ryosuke Higo, Sandy Island, 2020, mixed media

出品作品の紹介・作家略歴

ロイス・ワインバーガー(1947 年オーストリア・チロル州シュタムス生まれ。オーストリアのウィーンを拠点に活動し、2020 年に同地にて永眠)

1970 年から作品制作を開始し、以降自然を自らの主なメディアとしてオーストリア国内外で作品を発表してきた。「純正や真実の美学、そして秩序の力に抗する」実践として自らの創作を位置づけ、いわゆる人里植物と呼ばれる、人為による撹乱が激しい環境に生きる植物の存在を一貫してその創作の源とした。

本展では、ワインバーガーのフィールドでの実践を通して植物にむけられたそのまなざしを辿る。アーティストの思考のプロセスを巨大な地図として可視化した作品群「フィールドワーク」からは、歩行から連想される言葉を記した2004年の作品を含む2点を出展。また、11年間かけて収集された624点の雑草のスライド《ガーデンアーカイヴ》(1988-1999。本展ではデジタル化した複製版を展示)や、ベルリン市旧東ドイツ側の荒涼とした一帯からの景色を「飼い慣らされることのない、より『自然』な都市」の姿として撮影した写真作品などを含む十数点のドローイングや写真、詩作、行為の記録を展示する。

主な個展:ロイス・ワインバーガー展「見える自然/見えない自然」(ワタリウム美術館、2019)、Lois Weinberger | Gift(S.M.A.K、ゲント、2014)、Lois Weinberger(ウィーン・ルートヴィヒ財団近代美術館、2000)

主なグループ展、芸術祭等: ドクメンタ 14 (カッセル、アテネ、2017)、ヴェネチア・ビエンナーレ (オーストリア館、2009、フランツェスカ・ワインバーガーとの共作)、エンプティ・ガーデン (ワタリウム美術館、1999)、ドクメンタ 10 (カッセル、1997)

作家 HP: http://www.loisweinberger.net/

露口啓二(1950年徳島県生まれ。現在北海道を拠点に活動)

1990年代末より北海道の風景と歴史に着目した写真作品の制作を始める。「通常『写真家』は『出来事』に遅れて到着する」という露口は、出来事の結果を写しとるのではなく、文献や資料をたよりにひとつの場所を繰り返し訪れ、環境のなかに身を置くことで、そこに起こり続ける変化を捉えることを試みてきた。本展では、露口の代表的な連作「自然史」(2011~)と「地名」(1999~2017)を通して、場所に起こり続ける「ずれ」や「ねじれ」、そして「切断」に焦点をあてる。2011年に制作を開始した「自然史」は、それぞれの歴史や場所性をもった風景を繰り返し訪れ撮影し、異なる時点での風景を並置して見せる連作である。アイヌ文化の拠点であった漁川や沙流川の流域、古来より人間と自然の物理的・精神的交流の謂れをもつ吉野川、福島の帰還困難地区、そしてその境界線ーこれらの場所を捉えた写真は、「徐々にしかし着実に浸透してくる『自然』とよばれるもの」に覆われた風景の間に人為を超えた空間が存在することを示唆している。一方、「地名」は、かつてアイヌ語の音で呼ばれ、幕末期のカタカナ表記、その後の漢字表記を経るなかで場所に発生した意味のねじれや切断を念頭に置きながら、その場所性や固有性に対しイメージによって介入することを試みた作品だ。「風景から剥がしとった片々」である写真は、いかに場所の記述と共振し、捉えがたいものへと再び接続することができるのか。両シリーズの連関を意識したインスタレーションで、この問いの考察を試みる。

主な個展:自然史より (nap gallery、東京、2019)、自然史_北海道・福島・徳島 (CAI01、札幌、2014)、地名 (LIGHT WORKS、横浜、2002) 主なグループ展、芸術祭等:今も揺れている (横浜市民ギャラリーあざみ野、2018)、札幌国際芸術祭 (2014)、SNOW SCAPE MOERE — 再生する風景 (モエレ沼公園ギャラリー、札幌、2012)、ノンセクト・ラディカルー現代の写真 III (横浜美術館、2004)

作家 HP: http://www.fremen.biz/

ロー・ヨクムイ (羅玉梅) (1982 年香港生まれ。同地を拠点に活動)

自身の故郷であり、さまざまな人種や文化が交差する場所・香港の風景や地理に目を向け、その歴史と急速な社会変化を映し出す詩情豊かな作品を制作する。香港のアーティスト・ラン・スペース *1 ルーフトップ・インスティテュート共同創設者。

《殖物》(2019)は、人間と植物の複雑で情緒豊かなつながりを香港の地政学的アイデンティティと重ねた映像作品。3 部構成の本作は、英国統治時代の香港植物園で撮影されたファウンドフッテージと中国古典演劇のひとつである昆劇 *2 の役者が男性から女性へと姿を変える過程が伏線となり、人間と植物の恋を描いた戯曲『牡丹亭』を軸としたクライマックスへと至る。憂いや悦び、恋慕といった感情の動きが独特な身振りと音、歌によって表現される山場では、戯曲や詩作からの引用と作者の言葉がモンタージュされ、視聴覚と言語の間の揺らぎを生み出している。その揺らぎの感覚とはまさに、近年の民主化運動で掲げられた黒いバウヒニア *3 の旗のごとく、香港に漂う矛盾や戸惑いの不穏さを象徴しているともいえるだろう。

- *1アーティスト自身が運営を行う文化施設
- *2 明の時代に発祥したとされる中国の古典演劇のひとつ。『牡丹亭』はその代表作
- *3 バウヒニア・ブラケアナは香港原産の植物。別名「ホンコンオーキッドツリー」と呼ばれ、香港特別行政区の紋章にも使われている。 主な個展:殖物(香港ビジュアル・アート・センター、2019-20)、From Whence the Waves Came(アートバーゼル香港内パラサイト・アートセンターのブース、2018)、Victoria East(ヴィデオタージュ、牛棚芸術村、香港、2017)

主なグループ展、芸術祭等:

ジョグジャカルタ・ビエンナーレ XV「SEA BREEZE」(クスナディ・ハルジャスマントリ・カルチュラル・センター、ガジャ・マダ大学、2019)、第 23 回香港 IFVA 賞メディア芸術部門最終選考作品展(パオ・ギャラリー、香港アートセンター、2017-18)

作家 HP: http://www.lawyukmui.com/

ミックスライス(2002年結成。韓国のソウルを拠点に活動)

移住によって生まれる変化やその痕跡、想起される記憶に目を向け、時に特定の状況におかれた個人やコミュニティと 共同しながら、写真や映像、テキスト、アニメーションなどさまざまなメディアを用いた作品を制作している。

《つたのクロニクル》(2016)は、土地開発で移植された樹木の軌跡をたどって制作された映像と写真、印刷物、グラフィティによる作品群。移住、労働、共同体などミックスライスが一貫して掘り下げてきたテーマを、植物という物言わぬ存在にまつわる複数のナラティブとして物語っている。人間によって翻弄される樹木の姿には、韓国各地で行われる開発に向けられた真摯なまなざしが映し出され、「昨日もなく、明日もない、いつも今日だけがある世界を作る。そういう場所で、私たちはいかに定着することができるだろうか?」*という問いからは、植物の根や幹枝だけでなく、人間を取り巻く自然・社会環境までをも分断する持続性を省みない開発の課題が示唆される。

なお、植物に目を向けたミックスライスの作品には、《さまざまな方法で進化する植物》(2012)があり、これまでに東アジア文化都市 2017 京都や東京都現代美術館「もつれるものたち」(2020 年 6 月 9 日~ 9 月 27 日)など日本国内でも紹介されている。

主な個展: Migrating Flavours (イーストサイド・プロジェクツ、バーミンガム、2018)、Traversal project – mixrice report: welcome, my friend! (アートスペース・プール、ソウル、2010)、A Dish Antenna (オルタナティブスペース・プール、ソウル、2009)

主なグループ展、芸術祭等:Migration – Speaking Nearby(国立アジア文化殿堂、光州、2019)、韓国芸術家賞展(国立現代美術館ソウル館、2016)、 東アジア文化都市 2017 京都

*《つたのクロニクル》目録より引用

作家 HP: http://mixrice.org/

ウリエル・オルロー(1973年スイスのチューリッヒ生まれ。ロンドンとリスボンを拠点に活動)

オルローは、作品制作の過程で綿密な資料調査や現地取材を行い、**歴史や表象が取りこぼしてきたものに目を向け、記憶を喚起する空間的な作品を制作**してきた。2016 年から 18 年にかけて制作された作品群「植物の劇場」はオルローの代表作として高い評価を得てきた。本展では、伝統療法に用いられる薬草を議論の中心に据え、人間界と自然界、伝統と現代、先住民族の権利と知的財産権など対局にあるものをつなぎあわせることでその意味を問い直す映像 3 部作や、ロベン島刑務所の菜園と黄金色の極楽鳥花の栽培というネルソン・マンデラに関する象徴的なエピソードから、南アフリカの歴史に対する詩的アプローチとして制作された《グレイ、グリーン、ゴールド》(2015-17)を展示。南アフリカ共和国と植民地宗主国との間にあった**占領の歴史や今日に至る貿易交流の関係を、植物の視点を通して読み解く**作品群の核となる 5 作品を紹介する。

また、近作《アルテミシアから学ぶ》(2019)では、コンゴ共和国ルブンバシで抗マラリア薬として栽培されているアルテミシアの歴史について調査する一方、現地の女性たちとの継続的な協力関係の構築というアーティストが歴史や現地に介入することの新たな可能性を見せる。

主な個展: Learning from Artemisia(ラ・ロージュ、ブリュッセル、2020)、Soil Affinities(ラボラトワ・オーベルヴィリエ、パリ、2019)、Mafavuke's Trial and Other Plant Stories(ザ・ショールーム、ロンドン、2016)

主なグループ展、芸術祭等:ルブンバシ・ビエンナーレ(2019)、マニフェスタ 12(パレルモ、2018)、第 13 回シャルジャ・ビエンナーレ(2017)。また、 ミハイル・カリキスと共同であいちトリエンナーレ(愛知、2013)にも参加している。

作家 HP:https://urielorlow.net/

上村洋一(1982年千葉県生まれ。同地を拠点に活動)

視覚や聴覚から風景を知覚する方法を探り、フィールドレコーディングによって世界各地の環境にアプローチし、そこで得た素材やコンセプトをもとにインスタレーション、絵画、サウンドパフォーマンス、音響作品などを制作している。フィールドレコーディングを「瞑想的な狩猟」として捉え、その行為を通して、人間と自然との曖昧な関係性を考察している。

本展では、かつてオホーツク海で聴かれたという「流氷鳴り」をモチーフに制作した**新作インスタレーション《息吹のなかで》を発表**。自らの経験に基づいた目に見えないものとの対峙のための空間を、「自然とも人工とも言えない、掴みどころのない曖昧なもの」に浸る、**没入感のあるサウンドスケープとして構成**する。(詳細→p.4「特に注目の作品や展示」を参照)

主な個展: Hyperthermia—温熱療法(NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]、東京、2019)、Temporary Ground(Marueido Japan、東京、2019)、クリテリオム 82(水戸芸術館現代美術ギャラリー、2011)

主なグループ展:The Drowned World Anchor一沈んだ世界のアンカーー(Spiral Hall、2019)、普遍的な風景(国際芸術センター青森[ACAC]、2016)作家 HP:http://www.yoichikamimura.com/

展覧会概要

展覧会名:道草展:未知とともに歩む

期:2020年8月29日(土)~11月8日(日) ※会期は変更となる場合がございます

開館時間:10:00~18:00 (入場は 17:30 まで)

場:水戸芸術館現代美術ギャラリー

出品作家:上村洋一、ロー・ヨクムイ、ミックスライス、ウリエル・オルロー、露口啓二、

ロイス・ワインバーガー

休館 日:月曜日 ※ただし9月21日(月・祝)は開館

入場料:一般900円

高校生以下・70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料

※学生証、年齢のわかる身分証明書が必要です

※一年間有効フリーパス →「年間パス」2,000円は現在販売を中止しています

学生とシニアための特別割引デー「First Friday」

→ 学生証をお持ちの方と65歳~69歳の方は、毎月第一金曜日(9月4日、10月2日、11月6日)100円

主 催:公益財団法人水戸市芸術振興財団

援:オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム、在日スイス大使館 後

助 成:芸術文化振興基金

力:株式会社ジェネレックジャパン、サントリーホールディングス株式会社 協

企 画:後藤桜子(水戸芸術館現代美術センター学芸員)

関連プログラム

■ 多世代向けプログラム「秋の道草らぼ」

北野謙と道草で見つけた植物を感光させる日光写真を、和田文緒と展示作品の印象を基にオリジナルの香り を精油でつくります。

日程:北野謙ワークショップ 10月24日(土)、25日(日)

和田文緒ワークショップ 10月31日(土)、11月1日(日) 会場:現代美術ギャラリー ワークショップ室ほか

講師:北野謙(写真家)、和田文緒(香りと植物の研究家・アロマセラピスト)

参加方法:要申込・抽選

※詳細は水戸芸術館 HP をご覧ください

メインビジュアルについて

本展覧会のメインビジュアルは、水戸を拠点に活動するアーティスト・五嶋英門が担当しています。連想ゲーム のように人工物や自然、水戸市中心市街地の景色や記憶や空想のなかの出来事が連なっていくドローイングは、 あたかも五嶋自身の道草の記録のようです。道端の草という人間の生活圏に生きる自然と目的に縛られない自由 な歩行という「道草」がもつふたつの意味、そして人工物と自然のあわいがあらわされています。

五嶋英門

1975 年茨城県生まれ。

茨城県近代美術館のミュージアムショップを経営する傍ら、水戸のキワマリ荘というスペースを運営、イベント の企画をしたり、絵を描いたり音楽を作ったりして暮らしている。

同時開催

■ クリテリオム97 肥後亮祐

若手作家と当館学芸員が共同企画する新作中心の展覧会シリーズ。

肥後亮祐は、慣例や常識を問い、アートを通して考察するアーティストです。彼は、日常において無意識のうちにとるしぐさや振る舞い、発話などに着目し、作品を制作してきました。本展では「Google Map 上に誤記載された幻島」を題材に、社会や個人が無自覚にまたは意図的につくりだす「虚構」とその伝播について考察し、新たなかたちでの継承を試みる作品を発表します。

会期:8月29日(土)~11月8日(日)

会場:現代美術ギャラリー第9室

主催:公益財団法人水戸市芸術振興財団

企画:井関悠(水戸芸術館現代美術センター学芸員)

※クリテリオムは、ラテン語で「基準」を意味し、若手作家の新作を中心に紹介する企画展です。

※料金は展覧会入場料に含まれます。

プレス向け内覧会のお知らせ

2020年8月28日(金) 14:00~15:30 受付開始13:30

場所:水戸芸術館現代美術ギャラリー

出席者:出展作家

後藤桜子(水戸芸術館現代美術センター学芸員)

井関 悠(水戸芸術館現代美術センター学芸員)

※状況により、プレス向け内覧会の実施を見合わせる場合がございます。

人数把握のため、ご参加を希望される場合は必ず事前にお申し込みいただきますようお願い申し上げます。また、御来館の際には当館 HP「来館者へのお願い」をよく読んでお越しください。

【お問合せ】

水戸芸術館現代美術センター

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8120/Fax.029-227-8130 https://www.arttowermito.or.jp/展覧会について:後藤桜子(学芸員)

教育プログラムについて:森山純子、佐藤麻衣子(教育プログラムコーディネーター)

広報・写真貸出について:鳥居加織(広報) e-mail:cacpr@arttowermito.or.jp

*詳細は公式ツイッター http://twitter.com/MITOGEI_Gallery でも配信いたします。

【記事掲載についてのお願い】

- 1) 掲載にあたっては、正式展覧会名称と会期の表記をおこなってください。
- 2) 写真を掲載する場合は、写真に添付してあるキャプション・クレジット等を正確に表記してください。
- 3) 誌面掲載する電話番号は、水戸芸術館代表番号029-227-8111でお願いいたします。
- 4) 掲載記事とVTRは、資料として保管いたしますので水戸芸術館現代美術センター鳥居までご送付ください。
- 5) 取材及び収録等の取材は、必ず事前にお問い合わせください。都合により取材に応じることのできない場合が ございます。

【交通のご案内】

[JR] 東京駅(品川、上野発もあり)から常磐線特急で約72分~84分、水戸駅下車。駅北口バスターミナル4~7番のりばから「泉町一丁目」下車。降車後バスの進行方向に進み、すぐの交差点で大通り(国道50号)を渡り、横断歩道と平行する脇道をそのままお進みください。徒歩2分。

◎料金:特急 片道 3,890 円 / 普通各停 片道 2,310 円 (2020 年 7 月現在)

※ご予約・時刻表など詳しくはこちらをご参照ください。JR 東日本旅客鉄道 Tel.029-221-2836 http://www.jreast.co.jp/

[高速バス] 東京駅八重洲南口バスターミナルのりばから高速バス「みと号」(赤塚又は茨大ルート)で約100分、「泉町一丁目」下車、徒歩2分。切符は東京駅八重洲南口バス券売機、水戸駅北口バスチケット売場でお求めください。

◎ 料金: 東京駅-水戸駅 片道切符 2,120 円。ツインチケット(2 枚綴り回数乗車券 4,000 円)。(2020 年 7 月現在)

※ 詳しくはこちらをご参照ください。 茨城交通 Tel.029-251-2331 http://www.ibako.co.jp/

[お車] 常磐自動車道水戸 IC から国道 50 号に下りて市街地方面にお進みください。約 20 分、国道 349 号との交差点「南町 3 丁目」で左折(左手にみずほ銀行がございます。)、「2 つ目の信号」でまた左折をしてください。そこから信号ひとつ過ぎたところで水戸芸術館地下の市営五軒町駐車場のマークが見えてまいります。
◎ 駐車場料金:30 分まで無料、1 時間まで 200 円、以降 30 分毎 100 円/営業時間:7:00 ~ 23:00※高速料金・ルートなど詳しくはこちらをご参照ください。東日本高速道路「ドラぷら」 Tel.0570-024-024 http://www.driveplaza.com/